

江崎雪子さんの描いた「こねこのムーのおくりもの」という童話があります。当初、この童話の主人公は、ムーではなく、公園の動かない黒い木馬でした。ところが、子ども達は活発に動くムーに思いを重ねて話を聞きます。物語の中の大切な存在が主人公になり得なかった。この子ども達の率直な選択は、「主人公とはよく動き、活躍していたとしても、必ずしもその物語の中で一番大切な存在ではない」ことを私達に示しているように思えます。よく人生は物語に例えられます。洗礼者ヨハネは、その人生という物語の中に、主人公である自分よりも大切な、主イエスの存在を認め、見つめ続けた人でした。そのヨハネが捕らえられ、今度はイエスが主役となる物語、宣教活動が始まります。その第一歩としてイエスがとった行動は「ガリラヤに退く」ことでした。「退く」という一見消極的な行動の中に大切な意味が込められています。マタイ福音書2章では、夢のお告げに従うために、各々が「帰っていった(12節)」り、エジプトへ「去り(14節)」、ガリラヤに「引きこもつ(22節)」たりしますが、全て本日の「退く」と同じギリシア語が使われています。つまり「退く」という行動の中には、神の意志に従うという姿勢が示されているのです。このイエスの「退く生き方」、自分の意思や願いを一番に押し出すのではなく、「神」の意志を見つめ、聞く姿勢の中に、神の働きが光となって差し込まれていくのです。

「瞬きの詩人」として知られる水野源三さんに聖書の神を伝えたのは、宮尾隆邦という牧師でした。宗教の勧誘が絶えず嫌気が差していた水野さんが、宮尾牧師の話を聞こうと思ったのは、宮尾牧師の足が悪く、体を引きずりながら歩いていたこと。それでは暗い人かと思いきや、明るい笑い声が聞こえたこと。その2点であったそうです。宮尾牧師は、その生涯で、多くの人々に洗礼を授けたわけでも、非凡な才能で人々を魅了したわけでもありませんでしたが、1人の少年に聖書を渡し、洗礼を授けたことにより、その少年を通して多くの人々が聖書の神を知り、慰められ、洗礼を受け、信仰を支えられてきました。私はこの牧師の人生を思う時、私たちの人生に、主人公である私たち以上に大切な存在として生きて働かれる神の姿を思わされ、慰められます。私たちが病む時、老いる時、自分の力に限界を感じる時、もう自分の人生の終わりを感じます。けれども、主人公よりも大切な存在がその物語を生きています。退いて、その存在を見つめる時、私達の物語の中に、神の働かれる光が差し込まれ、自分の力では決して生み出すことのできない豊かな彩りがもたらされていくのだと思います。聖書はその生き方に私達を招きます。退く生き方の中に、私達を豊かな命へと変えていく、光なる神の介入があることを、私達も証していく群れでありたいと願います。

(文責：望月奈津子牧師)

